

活動を遂行する発話／活動と並行する発話

名塩征史

Utterances built in or in parallel with an activity

Seiji Nashio

Firstly, this paper classifies utterances in a social activity based on how they contribute to the progression of the activity into two kinds: utterances built in or in parallel with an activity. Necessity and frequency of utterances in an activity vary not only depending on its goal or framework but also every phase of its progression. Besides, some of the utterances seem to be decoupled with bodily behaviors conducted simultaneously, such as gestures, gazes, manipulation of tools, etc., to complete a requisite action. This paper aims to demonstrate how the above-mentioned utterances are used differently, shift each other, and vary in relations with other means through a multimodal analysis of interactions in two Japanese social activities—child-oriented Karate training and hairstyling in a barber shop—and discuss about a cognitive distance between utterances and other environmental elements coupled with a current activity.

Key words: *utterances in a social activity, cognitive distance, multimodal analysis*

キーワード：活動の中の発話、認知的距離、マルチモーダル分析

1. はじめに

本稿では、活動中に観察される多様な発話を大きく二つに分類し、両種の発話がそれぞれ現行の活動とどのように関連しながら連鎖し、どのような場面で互いにシフトしていくのかについて分析、記述する。その二つの発話とは、①活動の一工程として組み込まれその遂行に直接貢献する発話と、②活動の遂行とは関係なく単にそれと並行する発話である。本稿では、それぞれ異なる目的と枠組みを持つ二つの活動場面の中で観察される上記二種類の発話の振る舞いを、相互行為論的アプローチによるマルチモーダル分析を通して記述し、活動の中で環境的に結びつけられた相互行為（environmentally coupled interaction in an activity）の探究に資する新たな知見の抽出を目指す。

以下、第2章では、活動の中の発話について、共起する身体動作や周囲の環境との関連を中心に、先行研究における知見を援用しながら概観し、本稿の目的に至る経緯を概説する。第3章では、年少者向け空手教室における稽古場面を取り上げ、その中に観察される発話の振る舞いを現行の活動／行為との関連から分析し、続く第4章では、理容室において理容師が客に施す理容活動を取り上げ、同様の分析を行う。第5章では、前章での分析結果をもとに、それぞれの活動の性格が上記二種類の発話の使用やその頻度と様相にどのように影響しているか、また、特に発話と活動の「並行」について、観察された発話間に認められる差異に注目し一考を加える。最後に、第6

章で本稿の議論をまとめる。

2. 活動の中の発話

社会活動の中に観察される会話／相互行為を分析するエスノメソドロギー会話分析やマルチモーダル相互行為分析は、ある活動に参加する行為者の発話と身体動作がその目的の達成に志向して結びつき (intertwined/coupled)、さらには共に活動する他の行為者との間でも互いに協調することで、インタラクティブに活動が遂行される様相を記述の対象としてきた (cf. Streeck et al., 2011; Haddington et al., 2013; 2014; Meyer et al. 2017)。活動の遂行に貢献する複数の身体動作と発話は、当該の活動の場に在る人、物、状況との関連において結びつき、一つの行為として有意に連鎖している (Hatherly et al., 2008)。

ここでいう身体動作とは、例えば視線配布や頭部配置、指差しやジェスチャー、道具の操作、行為者間の身体配置の調整などを指し、それらの有意な連鎖が一つの行為となり、ある活動の一工程を成す。例えば、「車の運転」という活動における「左折／右折」という行為は、手によるハンドルやシフトレバーの操作、足によるアクセルやクラッチのペダル操作、目による周囲の安全確認といった複数の身体部位による動作が、適切な順番で連鎖し協調することによって達成される (cf. De Stefani and Gazin, 2014)。さらに共同する他者との相互行為となれば、各身体動作は単に行為を遂行するためのものだけではなく、他者との間で協調を達成するためのリソースにもなる。同じ「車の運転」場面でも、助手席に教官が同乗する教習場面を考えてみよう。ドライバーの「左折／右折」に対する教官の評価やフィードバックは、実際に「左折／右折」を遂行するドライバーの身体動作とそれによる周囲の環境の変化（ハンドルやシフトレバーの動き、車窓の移り変わり）に基づいて為されることになる (ibid.)。その際の教官の発話や身体動作も、先行する行為連鎖や周囲の環境に関連し意味づけられることで、適切な評価やフィードバックとして理解可能なものになる (ibid.)。活動の中の相互行為は、行為者間における多様な情報発信の応酬が周囲の環境との関連において有意に結びつけられたもの (environmentally coupled interaction) であると言える (Goodwin, 1994; Arminen and Auvinen, 2013)。こうした側面は、これまでも活動中の行為の修正 (repair) や教授場面などを分析／記述する研究の中で、特に強調されている (Keevalik, 2010; Arminen and Auvien, 2013; Broth and Keevalik, 2014; De Stefani and Gazin, 2014; 名塩, 2020; Nashio, 2022)。

発話、すなわち、音声言語による伝達は、観察できない認知的／感覚的要素を他者に伝える上では欠かせないものとなる。もちろん、観察可能な事物事象をあえて発話で描写することもあるだろう。未来の出来事について事前に説明する場合や、観察可能な出来事について情報を補足したり、分析したり、ある部分だけを抽出してそこに

注意を向けるように促したりする場合にも発話は有効である。ただし、発話が身体動作よりも優れた伝達手段であるとは言えない。当然、伝達する対象のどの部分を捉えるかによって、発話よりも身体動作による描写が好んで選択される場合もある。たとえば、McNeil (1992; 2000) によれば、発話に伴うジェスチャーは、ある事象を言語化する思考過程において、身体動作の直示性をもって表現するに値するものとして区別された事象の動きや配置、すなわち、イメージ的側面 (imagery) を表現している。この場合、ジェスチャーは情報の言語化を前提とする事象の再概念化 (reconceptualizing) を反映して産出されるが、発話だけでは伝えきれないイメージ的側面を伝える独立した表現形式として捉えることができる (McNeil, 1992; 2000; 喜多, 2000)。また、Craven and Potter (2010: 425) で指摘されているように、子供にある動作を指示する場合、言語による指示 (例えば、「両手で持ちなさい (“Hold it with two hands”)」など) とともに、要求する動作を実際にやってみせること (a physical demonstration) が、具体的にどのような動作をどうやって行うかを明確にし、子供が指示通りに動きやすくなるということもあるだろう。いずれにしても、発話は、身体動作とは独立した表現形式として表出するものであるが、大抵は、共起する身体動作と結びつき、連携する形で一つの行為の達成に貢献するものと考えられる。つまり、この場合の発話は、共起する身体動作と同様に、活動の遂行に貢献する手続きの一つとしてその過程に組み込まれた (built in) ものと言えるだろう。

一方で、Couper-Kuhlen (2010) や Arminen and Auvinen (2013) が指摘するように、我々の社会生活においては、黙々と食事をしたり、集中して何かを作ったりする時のように、活動を進めるに当たって必ずしも発話／会話を必要としない場面もある。そういった場面でも、まったくの無言というわけではなく、行為者間で何かしらの言葉が交わされることのほうが多いだろう。しかし、その際の発話は上記のように活動の遂行に直接貢献する発話ではなく、いわゆる雑談や世間話、同じ場を共有する者として互いに居心地が良くなるようにという配慮のもとに「ただ話しているだけ (just talking)」といったものになるだろう。こうした発話／会話は、活動の遂行に志向して行われたものというより、単に活動の進行と並行する (in parallel) ものと言えるだろう。

実際の活動の中では、以上で指摘した二種類の発話、すなわち、活動の一工程として組み込まれその遂行に直接貢献する発話と、活動の遂行とは関係なく単にそれと並行する発話が混在している。以下、前者を「遂行する発話」、後者を「並行する発話」と表記する。本稿では、それぞれ異なる目的と枠組みで進められる二つの活動を取り上げ、その中に観察される遂行する発話と並行する発話の切り替え場面を分析する。本稿における分析と記述は会話／相互行為論的アプローチにより、ビデオカメラで撮影された映像データと、その中に収録された発話／会話を中心に書き起こした文字資

料に基づいて行われる*。こうした分析に基づき、本稿では遂行する発話と並行する発話の使い分けがどのように行われ、それが各活動の性格とどのように関連するのかについて考察する。

3. 分析1：稽古中の指導と発話

3.1. データの概要：年少者向け空手教室

本章で取り上げるのは、年少者向け空手教室における稽古場面である。稽古には、主たる指導者である師範（M）が1名、有段者である指導者が2名、有段者ではないが上級者として指導を補助する成人の練習生が2名、そして小中学生の練習生（s）が20名前後参加している。一回の稽古は、準備運動、基本動作の反復、形（かた）の



図1：形の練習風景

練習、組み手練習などで構成されるが、ここで取り上げるのは、師範（M）がまだ稽古に参加して間もない練習生3名（s1-3）だけを抜き出し、わかりやすく見本を示しながら丁寧に形を指導している場面である（図1）。なお、本データのさらなる詳細については、名塩（2017bc; 2020; 2021b）を参照されたい。

次節で取り上げる場面において特に留意すべきなのは次の2点である。まず、この活動における師範の行為が初心者への指導／教授を目的とするということである。その指導／教授には、わかりやすさや伝わりやすさが求められ、それゆえに師範は、指導の対象となる動きを実際にやってみせるだけでなく、その動きについて解説したり、特に意識すべきポイントに言及したりする発話を度々行うこととなる。もう一点は、練習生が初心者であるがゆえに、練習生だけで自律的に形を試行するのが難しいということである。そのため、師範はその試行を先導する「号令」を用いて、練習生の動きを逐一制御しなければならない（名塩, 2021b）。以上の点との関連から、当該の活動において師範は指導を遂行する発話を多用することになるが、次節では、そうした指導の合間にも並行する発話が行われていることに着目する。

3.2. 並行する発話連鎖へのシフト

断片1では、師範Mが練習生s1-3に対して「太極その2」、および、「太極その3」と呼ばれる形の指導を行っている場面の一部である。全部で20工程（Step-1～20）に分けられる「太極その2」の試行が、10行目の「はい休め」というMの発話によって終了し、その後、11-19行目でs1-3の態勢を整えるやり取りを経て、20行目から「太極その3」への試行-指導に移行する流れとなっている。なお、断片中の「Step」は、その工程で指定された技を繰り返し出していること表示しており、各工程はMによる号

令 (<しち>、<はち>、など) に続いて実践されている。例えば、23 行目の「*Step-1*」で実践されている技は、直前の M の発話にある「後屈立ちの内受け」であり、その後 <いち> の号令に続いて練習生たち (ss) も、25 行目で「後屈立ち (*Step-1.1*)」、29 行目で「内受け (*Step-1.2*)」を繰り返している。

断片 1：形の練習と指導

- 01 M: <しち>
 02 ss: *Step-17*
 03 M: <はち>
 04 ss: *Step-18*
 05 M: <くう>
 06 ss: *Step-19*
 07 M: <じゅう>
 08 ss: *Step-10*
 09 M: はい直れ
 10 はい休め
 11 はい裾直して：：
 12 (3.0) ---図2
 13 M: やってて、気持ちに余裕が、ありますか ---図3
 14 やってて気持ちに余裕がある ---図4
 15 次はこう行くぞ：ああ行くぞ：って ---図5
 16 M: 気持ちが考えられる
 17 いっぱいいっぱい ---図6
 18 いっぱいいっぱい ---図7
 19 いっぱいいっぱい ---図8
 20 はい太極その3 ---図9
 21 はいよ：い
 22 M: [はい後屈立ちの内受けから
 23 M: [*Step-1*
 24 M: <いち>
 25 ss: *Step-1.1*
 26 M: [今度は後ろの膝曲げる：
 27 M: [*Step-1.2*
 28 M: 背中まっすぐ：
 29 ss: *Step-1.2*



図 2：断片 1 の 12 行目



図 3：断片 1 の 13 行目



図 4：断片 1 の 14 行目



図 5：断片 1 の 15 行目



図 6：断片 1 の 17 行目



図 7：断片 1 の 18 行目



図 8：断片 1 の 19 行目

10 行目の「休め」の掛け声により、稽古の緊張感がわずかに緩むと、12 行目で M は汗を拭きながら、s1 に近づいて行き（図 2）、次の形の試行に向けて練習生たちの間隔を改めて調整し始める（13-19 行目）。この時点までに M が発した号令（01, 03, 05, 07 行目）や掛け声（09, 10 行目）などは、練習生たちの形の試行を先導し、また試行後の行動を適宜指示する発話であり、現行の稽古に直接関連する遂行する発話であると言えるだろう。これらの発話は、鋭く大きな声で発せられ、稽古中の指示として独特の際立ちが認められる。

一方、13 行目（図 3）で s1 の肩を持ってその立ち位置を決めながら発せられた「気持ちに余裕が、ありますか」という M の発話は、どこか穏やかな雰囲気のある口調となっている。「～ますか」と発話末が丁寧体になっていることから、ここでの M の態度が稽古中のそれとは明らかに異なるものであることがわかる。この 13 行目の発話には、時々ポーズを挟むやや歯切れの悪い様相からも、師範の発話らしからぬ様子が伺える。その後も M は、同様に s2、s3 の順に近づいて行って彼らの肩を持ち、その体に直接力を加えて立ち位置を決めるが（14-16 行目、図 4-5）、ここまでの一連の「立ち位置／間隔の調整」に伴う発話もまた、11 行目までに見られた遂行する発話とは異なり、穏やかな口調となっている。17 行目で M は s2 に視線を向けて「いっぱいいっぱい」と問いかけ（図 6）、続いて 18 行目で s1 にも視線を向けて同じ問いかけを行う（図 7）。そして 19 行目でもう一度同じ問いかけを行う際には（図 8）、細かく何度かうなずき、s3 に視線をやる動きの流れで画面奥の方へと振り返りながら、「はい太極その 3」と次の形の名称を宣言する（20 行目、図 9）。17-19 行目の発話「いっぱいいっぱい」も、13-16 行目の発話と同様に穏やかな口調であるが、20 行目の発話「はい太極その 3」では、稽古を遂行する発話としての声量と鋭さを取り戻し、その際立ちが稽古の場に緊張感を与えている。その後 M は 21 行目で練習生に背中を向け、「はいよ：：い」と試行開始の掛け声をかける。22 行目では、すでに稽古モードに戻り、当該の形の第一工程「後屈立ちの内受け」を発話で確認しつつ実際にやってみせる先行指示(navigation)が始まっている。

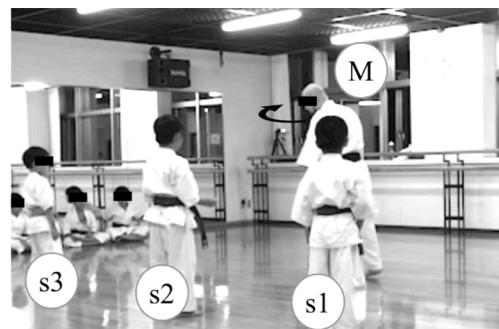


図 9：断片 1 の 20 行目

13 行目から 19 行目までの M の発話は上述の通り、穏やかな口調で練習生たちに「気持ちに余裕があるか」を問うものであり、その時に行われている「立ち位置／間隔の調整」という行為には直接関連がない内容である。したがって、これらの発話は活動に並行する発話ということができるだろう。ただし、並行する行為に直接貢献しないというだけで、現行の活動と全くの無関係であるとは言い難いことには留意が必要だ

ろう。それは、13-19 行目の並行する発話の口調が、他の遂行する発話に比べて穏やかになっており、10 行目の「休め」の掛け声から始まるこの時間帯（12-19 行目）に似つかわしく調節されていることにも表れている。さらに、この穏やかな調子で続く並行する発話から強く鋭い調子の遂行する発話へのシフト（19-20 行目）は、当該の遂行する発話を一層際立たせ、稽古の再開を再開らしく演出しているように見受けられる。つまり、ここで言う「並行」とは、現行の活動から完全に切り離され独立しているということではなく、現行の行為とは志向／目的を異にするという意味で距離を取りつつも、活動の展開／進行への意識を反映しつつ「今ここ」に望ましいスタイルの選択がなされる程度の結びつきは保たれていると考えるべきだろう。

4. 分析 2：サービス提供中の発話

4.1. データの概要：理容室

本章で取り上げるのは、理容室における理容活動（散髪、剃毛、洗髪、整髪など）の場面である。ここでの活動は、理容師（B）が対価を得て客に提供するサービスであり、一回の理容活動にかかる時間は 40 分から 90 分程度である。前章で取り上げた稽古場面とは一転して、理容活動に伴う発話のほとんどは並行する発話であり、遂行する発話はごく限られた局面にしか現れない。特に次節で分析する客（C）

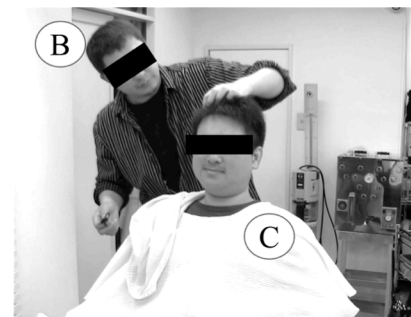


図 10：理容活動の様子

に対して行われた理容活動では、活動の冒頭で B が「いつもぐらい？」と C に対して仕上がりの希望を確認して以降、最後のスタイリングが開始される場面（断片 2）までの約 40 分間に、理容活動に直接関連する遂行する発話は一度も行われなかった。この遂行する発話の少なさには、いくつかの原因が考えられる。ここでは C が数年間にわたって定期的に当該理容室を利用している常連客であること、また B が熟練した技術を持つ理容師であることなども関連しているに違いない。また理容活動においては、先の稽古場面のように現行の行為について相手に伝えたり、評価したりすることを目的とするのではなく、あくまで遂行された活動の結果が要となり、その過程は（少なくとも客にとっては）逐一言及されるに値しないという認識が影響していることも考えられる。以上を踏まえた上で、次節では理容活動に並行する発話の合間に挿入される遂行する発話の様相を分析してみよう。なお、本データのさらなる詳細については名塩（2017a; 2021a; 2022）を参照されたい。

4.2. 遂行する発話連鎖へのシフト

断片 2 は、当該理容活動の終盤にあたるスタイリングが行われている場面である。これ以前も含め、理容活動中は、主に当時大学生の C の就職活動に関する話題で会

話が展開し、その内容は現行の理容活動とは関連がない。つまり、断片 2 の 13 行目まで続いている会話は、並行する発話の応酬によるものである。01 行目からはある企業の話となり、その企業名を漢字でどのように書くのかを C が B に教えている(断片中の X, Y, Z はそれぞれある特定の漢字を表している)。

断片 2：スタイリング作業への移行

- 01 B: どういう字書くの？
 02 C: XYZはあの::、《Xで始まる語》のXに、
 03 B: うん
 04 C: 《Yで始まる語》のYに、
 05 B: hh あ、《Yで始まる語》のYね
 06 [@@@
 07 C: [はい、そ、ね Zは、
 08 B: 北海道[の
 09 C: [建て物のZ
 10 B: 建て、あ:::, うん
 11 へえ、XYZ
 12 C: XYZ
 13 B: あ: 知らなかった ー図11
 14 じ、大丈夫？ 長さ ー図12
 15 C: はい
 16 B: 大丈夫？ ー図13
 17 C: はい
 18 B: はい
 19 B: 何（なん）もつけなくていいの？ ー図14
 20 C: ん: まあ、あ: でもじゃあ、軽く
 21 B: 軽くつけとくかい？
 22 C: はい
 23 (0.7) ー図15
 24 B: 七三？ に分けてく？ ー図16
 25 C: ん:::::
 26 B: @@@@
 27 C: どう、んのほうがいい[かな:
 28 B: [ふつうでいい、@@@ ー図17
 29 ナチュラルなんでいい？ [@@@
 30 C: [うん、そうですね @@
 31 B: 気持ち悪いぐらいの七三で @@@
 32 C: @@@@ ー図18
 33 びちい:: [@@@@@
 34 B: [@@@@@
 35 気合い入ってんなあいつ: みたいな @@@
 36 C: @@



図 11：断片 2 の 13 行目



図 12：断片 2 の 14 行目



図 13：断片 2 の 16 行目

この会話と並行して B は小さなハサミで C の髪の高さを整えていたが (図 10)、話

題となっていた企業名の漢字表記が明らかとなったあたりでその作業も終了し、13 行目で B は「あ：知らなかった」と発話しながら、左後方のワゴンから鏡を取り出す(図 11)。続けて、その鏡を C の左後方に掲げると、正面の鏡に視線を向けて「大丈夫？長さ」と C に問いかける (14 行目、図 12)。B が掲げる鏡には C の襟足が映っており、これが合わせ鏡によって C にその長さを確認してもらおうとする手続きであることがわかる。それに対して C が「はい」と返答すると (15 行目)、続けて B は C の右後方に鏡を移動し、同じく「大丈夫？」と問いかける (16 行目、図 13)。それにも同様に C が「はい」と答えると (17 行目)、B も「はい」と言って鏡を下げ (18 行目)、それを左後方のワゴンの中に戻す (19 行目)。B はその後すぐに C の方に振り向きながら、「何もつけなくていいの？」と発話し (19 行目、図 14)、その発話末時点で正面の鏡に視線を送る。これは、スタイリングの仕上げとして整髪料をつけるかどうかの確認であるが、判断に迷う C (20 行目) に対して B が「軽くつけとくかい？」と提案すると (21 行目)、C は「はい」と同意している (22 行目)。



図 14：断片 2 の 19 行目



図 15：断片 2 の 23 行目



図 16：断片 2 の 24 行目



図 17：断片 2 の 28 行目



図 18：断片 2 の 32 行目

14 行目から 18 行目までの仕上りの確認作業に伴う発話は、すべて遂行する発話と言えるだろう。14、16 行目の「大丈夫？」という発話は、C の後方で左右に掲げられる鏡の移動や、正面の鏡を介して客と目を合わせる理容室特有の視線配布 (名塩, 2022)、さらに C からの適切な返答とも結びついた一連の協調 ([a] sequential coordination of talk and action) (Arminen and Auvinen, 2013) の中に組み込まれている。この時、B がワゴンから取り出した鏡は、客の後頭部の仕上がりを確認する作業以外には用いられないが、理容活動では決まったタイミングで必ず用いられる道

具の一つである。この鏡の現れが、遂行する発話の必要性をその場に投射することで確認作業の開始が明確になり、BC 間の半ば儀礼的なやりとりが滞りなく達成されているのがわかる。また、続く 19 行目から 22 行目までの発話も、これから行われるスタイリングに先立って必要になる確認作業（整髪料を使うかどうか）に直接関連するものであり、これらも遂行する発話と言えるだろう。この一連のやり取りは、理容活動が客の期待通りの仕上がりになりつつあることを理容師と客との間で確認する重要な工程であるということで、B も C も、それまで並行する発話／会話に費やしていた言語運用を、理容活動の遂行に充てざるを得なくなったとも言えるかもしれない。

23 行目以降は再び並行する会話となるが、この会話もやはり、現行の活動から完全に切り離されたものとは言い難い。22 行目で整髪料の使用に関する確認が終わったところで、B は C の右側の壁に並んでいる整髪料から適当なものを手に取り (23 行目、図 15)、それを左掌に絞り出しながら、C に向かって「七・三？」と問いかける (24 行目、図 16)。この問いかけは、一見スタイリングの仕上がりに関する提案／確認のようでもあり、そうだとすれば現行のスタイリング作業に直接貢献する遂行する発話として捉えることができる。少なくともそれが髪型の一種であることから理容活動との明確な接点が見受けられる。しかも、それに対して C が「どうしようかなあ」と悩むそぶりも加味すると、そこにはスタイリングを巡る交渉としての様相も見てとることができる。しかしながら、26 行目からすでに B の笑い (@) が始まり、それに呼応するように C にも笑いが起こっていることから、ここでの髪型を巡るやりとりが冗談であり、真剣に仕上がりについて交渉していたわけではないことが明白となる。それでも、28-29 行目の「ふつうでいい」、「ナチュラルなんでいい？」などは、遂行する発話と捉えられそうではあるが、24 行目から始まる B の一連の振る舞い、すなわち、整髪料を左掌に取り (24 行目、図 16)、それを両掌を擦り合わせて馴染ませながら C の背後に移動して (28 行目、図 17)、C の頭髪を揉みしだくように整髪に着手するまで (32 行目、図 18) の流れは、一切の躊躇なく滑らかに進められている。これは、28-29 行目までに BC 間の会話がすでに現行のスタイリング作業への志向を失っており、その会話の展開如何に関係なく、スタイリング作業がすでに「ナチュラルな」仕上がりに向かって進められているものと考えられるだろう。したがって、24 行目以降の発話は、現行の活動の遂行に直接貢献しない並行する発話というべきだろうが、ここまでの会話と現行の理容活動との接点を捉えた絶妙な情報の「共-選択 (co-selection)」(Sacks, 1995 [1992]; 串田, 1997) によって推移していることは否めない。

5. 考察

本稿における遂行する発話と並行する発話の分類は、あくまで現行の活動／行為の

遂行に直接貢献する発話であるか否かを基準とするものである。そのため、当該の活動／行為が、そもそも発話による言及を必要とするものであるかどうか、そうした局面がどれだけ多く含まれているかが、両発話の発生率に大きく関わるものと考えられる。4.1 で取り上げた空手の稽古場面では、師範が練習生たちの形の試行を先導し、適宜見本を示しながら指導を加えることが活動の目的となるが、それを達成するためには、練習生の試行を物理的に妨げることなく先導し、ポイントとなる動きや身体部位に注意を向けさせ、適宜解説を加えることが必須となる。つまり、当該活動の遂行には必然的に発話が組み込まれることになるため、遂行する発話の頻度は高くなると考えられる。一方、4.2 で取り上げた理容室の場面では、主たる行為者である理容師の目的は、客が期待する仕上がりを実現することであり、そこに到達するまでの過程、すなわち、どのように髪を切り、洗い、乾かすかなどについては、それが客に想定外の不利益をもたらさない限り、言及するに値しない。つまり、現行の活動について逐一言語化する必要がないため、遂行する発話は最小限に抑えられ、活動中の発話のほとんどが並行する発話となると考えられる。

また、前章の分析では、並行する発話であっても、現行の活動／行為と完全に切り離されているとは言い難いということも示唆された。空手の稽古場面において形の練習中に挿入される「休む」場面では、師範の並行する発話もその状況に似つかわしい穏やかな口調となっていた。また、理容室の場面で観察された並行する発話の中にも、一見遂行する発話と思えるほどに現行の活動／行為との接点を確保しつつ話題が推移し、その場に特化しているとも言えそうな会話となっていた。むしろそれらを遂行する発話と区別する要素は、会話中に起こる笑いだけであり、その笑いが当該の発話連鎖を冗談として意味づけ、いわゆるビジネス／サービスとしての真剣さが求められる理容活動との認知的距離を暗示しているものと考えられる。この活動と各発話との認知的距離については、遂行する発話と並行する発話との間ではもちろん、並行する発話同士を比べてみても幾分の差異を見出すことができる。たとえば、断片2の24行目の発話「七・三？ に分けてく？」と現行の行為「スタイリング」との距離は、断片1の13行目の発話「やってて、気持ちに余裕が、ありますか」と現行の行為「立ち位置／間隔の調整」との距離に比べて明らかに近い。こうした認知的距離の概念は、発話と言語行動、さらには他の環境的要素との結びつきの様相をより詳細に記述することを可能にするかもしれない。

6. まとめ

本稿では、活動の中に観察される発話を、①遂行する発話、すなわち、活動の一工程として組み込まれその遂行に直接貢献する発話と、②並行する発話、すなわち、活動の遂行とは関係なく単にそれと並行する発話の二つに分類した。その上で、空手

の稽古において師範が練習生たちの形の練習を先導し指導を加える場面(4.1)と、理容師が客に対して理容活動の仕上げとなるスタイリングを施す場面(4.2)を取り上げ、各場面で観察された遂行する発話と並行する発話の切り替え場面を分析した。前者の場面では、先導／指導する上で必要となる号令や解説を担うための遂行する発話が多く観察される中で、練習の合間の一時的に緊張感が緩む時間帯に並行する発話も観察された。これらの並行する発話は、遂行する発話に比べて穏やかで、休憩時に似つかわしい口調に調節されていた。その口調の違いが、一転して大きく鋭く発せられる遂行する発話の現れを際立たせていた。さらにその際立ちが、練習の再開を再開らしく演出し、メリハリのある稽古の進行にも一役買っているようにも見受けられた。一方、後者の場面では、活動中に観察されるほとんどの発話が並行する発話となっている中で、活動の終盤にあたるスタイリング作業に伴う遂行する発話が、当該活動に特有の道具の使用や視線配布と有意に結びつき、協調的に連鎖する様相を明らかにした。また、その遂行する発話の連鎖から再び並行する発話にシフトする連鎖が、笑いを伴いながら冗談として展開しつつ、現行のスタイリング作業と接点のある情報の選択によって推移するという、活動に近い距離で並行する発話の連鎖であることを指摘した。本稿では、こうした活動と各発話との認知的距離を考慮した記述が、社会活動における相互行為のさらなる詳細を捉えることに貢献するものと期待する。さらに多様な活動場面での発話と身体動作の協調的連鎖を対象に認知的距離を踏まえた分析と記述を行うことが今後の課題である。

注

- * 本稿で分析に用いる文字資料の表記について、‘[’ は発話の重なる開始部分、‘:’ は音の伸ばし、‘#’ は聞き取れない発話、‘@’ は笑い、‘(0.0)’ は沈黙の期間(秒数)、『斜体』は身体動作、および、それに関する補足をそれぞれ表す。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 21K11500、および、22K018790 の助成を受けたものです。

参考文献

- Arminen, Ilkka and Auvinen, Petra (2013). Environmentally coupled repairs and remedies in the airline cockpit: Repair practices of talk and action in interaction. *Discourse Studies*, 15(1): 19-41.
- Broth, M. and Keevallik, L. (2014). Getting Ready to Move as a Couple: Accomplishing Mobile Formations in a Dance Class. *Space and Culture*, 17(2): 107-121.
- Couper-Kuhlen, E. (2010). Commentary on Stivers and Rossano: ‘Mobilizing response’. *Research on Language and Social Interaction*, 43(1): 32-37.
- Craven, A., and Poter, J. (2010). Directives: Entitlement and Contingency in Action. *Discourse*

- Studies*, 12(4): 419-442.
- De Stefani, E., and Gazin, A. D. (2014). Instructional sequences in driving lessons: Mobile participants and the temporal and sequential organization of actions. *Journal of Pragmatics*, 65: 63-79.
- Goodwin, C. (1994). Professional vision. *American Anthropologist*, 96(3): 606-633.
- Haddington, P., Mondada, L., and Nevile, M. (Eds.) (2013). *Interaction and Mobility: Language and the Body in Motion*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Hatherly, D., Leung, D., and MacKenzie, D. (2008). The finitist accountant: Classifications, rules and the construction of profits. In Pinch, T., and Swedberg, R. (Eds.) *Living in a Material World: Economic Sociology Meets Science and Technology Studies*, MA: MIT Press, pp. 131-160.
- Keevallik, L. (2010). Bodily quoting in dance correction. *Research on Language and Social Interaction*, 43: 401-426.
- 喜多壮太郎 (2000). 「ひとはなぜジェスチャーをするのか」『認知科学』7(1): 9-21.
- 串田秀也 (1997). 「会話のトピックはいかに作られていくか」谷泰 (編)『コミュニケーションの自然誌』新曜社, pp. 173-212.
- McNeill, D. (1992). *Hand and Mind: What Gestures Reveal about Thought*. Chicago: University of Chicago Press.
- McNeill, D. (2000). Growth Points, Catchments and Contexts. 『認知科学』7(1): 22-23.
- Streeck, J., Goodwin, C., and LeBaron, C. (Eds.) (2011). *Embodied Interaction: Language and Body in the Material World*. New York: Cambridge University Press.
- Meyer, C., Streeck, J., and Jordan, S. (Eds.) (2017). *Intercorporeality: Emerging Socialities in Interaction*. New York: Oxford University Press.
- 名塩征史 (2017a). 「理容室でのコミュニケーション-理容行為を〈象る〉会話への参与-」片岡邦好・池田佳子・秦かおり(編)『コミュニケーションを枠づける-参与・関与の不均衡と多様性』くろしお出版, pp. 237-256.
- 名塩征史 (2017b). 「空手の基本動作を教授・練習する場の相互行為: 統率の枠を超える参与者(師範)による個別指導の観察と分析」『日本認知科学会第34回大会発表論文集』: 221-228.
- 名塩征史 (2017c). 「「何が始まるか」を伝える一振り: 年少者向け空手教室における個別指導の間合い」『日本認知科学会「間合い」研究分科会, JCSS SIG Maai 2017』
[https://www.dropbox.com/s/vdd7ip7h0hvw6fh/maai_9th_nashio.pdf?dl=0].
- 名塩征史 (2020). 「身体的技術の指導-学習過程における相互行為-年少者向け空手教室での「相手を意識した」経験の共有-」『社会言語科学』23(2): 100-115.
- 名塩征史 (2021a). 「会話への途中参加を巡る動機付けと許容に関する認知語用論的考察-理容室でのコミュニケーションを対象とした事例分析をもとに-」田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝(編)『動的語用論の構築へ向けて 第3巻』開拓社, pp.162-181.
- 名塩征史 (2021b). 「空手の形(かた)の稽古に用いられる「号令」: 実在しない相手との「間合い」」『日本認知科学会「間合い」研究分科会, JCSS SIG Maai 2021』
[https://www.dropbox.com/s/fk1s9kpb87ooh7z/maai_19th_nashio.pdf?dl=0].
- 名塩征史 (2022). 「日常会話を伴う理容行為に状況づけられた「見る」-鏡を介して「見る／見せる」システムの分析」牧野遼作・徳永弘子・砂川千穂(編)『言語・コミュニケーション研究の地平 第

3 卷』 ひつじ書房, pp. 102-125.

Nashio, S. (2022). Interaction for Synchronization: Multimodal Analysis of the Process of Instructing and Learning Shamisen Skills. *The Bulletin of Morito Institute of Global Higher Education*, 4: 57-69.

Sacks, H. (1995 [1992]). *Lectures on Conversation*. Oxford: Basil Blackwell.